

幼いころ、テレビで原始時代をテーマにした漫画を見たことがある。とても面白く、家族そろって大笑いしたので鮮明に覚えているのだ。室内で小さな恐竜を飼っていたり、登場人物がひょう柄の衣類を身に着けていたり、骨製の家具が飾ってあるなど、子供向けにしては、なかなか凝った作りだった。中でも、ずっと頭に残っていたのが巨大な石のお金だ。漫画の設定では、買い物をするのに、このお金をごろごろ転がして、お店まで運ばなければならなかった。子供ながらに大変だなと感じたのを思い出す。

しかし今でも、石の貨幣が流通している地域があると知って驚いた。フィリピンの東に位置する島では2000年ほど前から、それらを使った品物の売買が行われ、冠婚葬祭などの儀式にも盛んに用いられた。そして現在も、りっぱに通用しているというのだ。サイズとしては小さいもので直径50センチ程度、大きいものだと3メートル以上にもなる。中央には穴が空けられていて、棒を通して運びやすくしてある。島の中には銀行が幾つかあり、大小取り混ぜた石の貨幣が、所狭しと並んでいるという。なかなか迫力ある光景だろう。そしてこの価値を決めるのが、大きさではないと聞いて、またまた驚いた。なんと入手の難易度によるというのだから面白い。人々は、より良質な石を求めて遠くまで出掛けていくのだが、交通手段は専らカヌーだ。重量のある大物を小さな舟で運搬するのは、まさに命懸けの仕事といえる。その勇気をたたえ、貨幣には採掘者の名前が刻まれるのだそうだ。

こんなお金なら、銀行強盗の心配はまず無用だろう。しかし、その代わりに世界じゅうの博物館が熱い視線を送っている。直径4メートルという最大の物は、所有者が島から出すのを拒否しているため、歴史学者たちにとっては、興味津々でも手の届かないあこがれの存在なのだそうだ。